はじめに

研究が好きでこの道を選び、うまくいって新発見を成し遂げたときの高揚感や喜びは、何ものにも代えがたいものです。ところが、研究を続けるうちに、多くの若者がある問いに直面するでしょう。

「自分はこの先、研究者として生きていけるのだろうか」

研究者という職業は、理想と現実の落差が非常に大きい世界です。生命科学は、生命の仕組みを解き明かし、疾病の診断や治療、さらには寿命や健康といった社会的課題にも貢献する重要な学問です。その一方で、研究者個人の生活は決して安定しているとは言えず、多くの人が将来への不安を抱えながら研究を続けています。志をもって博士課程に進学した若者の多くが、途中で別の道を選ばざるを得ない現実も、いまや珍しいことではありません。

私は、研究者としてのキャリアの初期に、一度その道を完全に断たれたと感じた人間です。本書で私が考える「研究者として幸せに生きる」とは、必ずしも著名な研究者になることや、華々しい業績を残すことではありません。自分に合った環境で、納得感を持って研究を続け、生活と心のバランスを保ちながら研究者として生きていくことです。そのためには、「環境を選び直す力と適応する力」が重要になると私は考えています。

研究者になること自体は、決して特別な人にのみ開かれているわけではありません。しかし、研究を職業として続けていくためには、必要なトレーニングを受け、経験を積み、結果を出し続けることが求められます。この現実の中で、「研究が好き」という気持ちだけを頼りに走り続けることは、しばしば人を疲弊させます。だからこそ、自分に合わない環境から離れる選択や、立ち止まって考え直す勇気が必要になるのです。

私は、東京郊外の私立大学を卒業後、同大学の修士課程を修了し、そ

のまま博士後期課程へと進学しました。しかし博士課程1年次、所属大学院で研究を継続できなくなるという事態に直面しました。詳細は控えますが、人間関係が災いして、大学院生でありながら研究に必須の大学共有の機器を使用することができなくなってしまったのです。その結果、研究を続けることができず、最終的には大学院を中退せざるを得ませんでした。当時は、強い無力感と孤独感に包まれ、研究者としての道は完全に閉ざされたと感じていました。

しかし皮肉なことに、この挫折こそが、私の人生を大きく変える転機となりました。振り返ってみれば、研究者としての新たな扉が開いた瞬間は、順風満帆な成功の中にではなく、むしろこのどん底の時期にあったのだと思います。

私がここまで研究者として歩み続けることができた理由は、「諦めなかった」ことと、「自分に合う環境を探し続けた」ことに尽きます。研究者を諦めきれなかった私は、博士課程ができてまもない国立大学の博士課程に再入学して、新たな研究テーマを得て大学院をやり直しました。捨てる神あれば拾う神あり。人間万事塞翁が馬。これらの言葉は、私自身の経験そのものです。

私はこれまでの研究者人生において、100名以上の大学院生と関わってきました。その指導においては、うまくいったこともあれば私の力が及ばなかったこともありました。また、学会活動を通じて若手研究者のキャリアパスにも長年携わり、多くの研究者の悩みや選択を見てきました。本書では、これから研究者を目指す若者、そして彼らを支える立場にある中堅・シニア世代の方々に向けて、私自身の失敗と回り道、そしてそこから得た知見を率直に共有したいと考えています。

この本が、研究者としての道に迷いを感じている誰かにとって、次の一歩を考えるための小さな手がかりとなれば幸いです。